

平成26年 朝日旧友会新年総会



挨拶する中江会長

左から新会賓代表下村さん、大野、徳江両副会長、木村社長、飯田東京代表

朝日旧友会報

朝日旧友会

東京都中央区築地五―三―二

朝日新聞東京本社内

〒104-8011

TEL 三三四五〇一〇二二

FAX 三三四四三―三三三八

平成二十六年年度総会日程

「日時」定時総会 五月十五日(木)

「場所」朝日新聞記念会館(有楽町マリオン11階)午後1時30分から映画「探偵はBARにいる2」を上映します。

和気あいあい 新年総会盛大に

懐かしの会員・仲間元気に集う

東京朝日旧友会の二十六年新年総会は、一月十六日(木)午後四時から有楽町マリオンの朝日ホールで開かれた。朝日人としての苦楽を共にした同僚、仲間と半年ぶりに会えるとおつて、午後一時半からの映画「はやぶさ・遙かなる帰還」上映前には、懐かしい顔が次々姿を見せ「やあ、しばらく、元気だった、うれしい、よかった……」と肩を抱き合い、手を堅くにぎり涙ぐむ光景もあった。

総会には中江利忠会長、徳江景英、大野功雄両副会長はじめ会員二百八十五人、本社側から木村伊量社長、飯田真也東京代表ら役員・幹部四十人が出席、盛んな交流が行われた。

立ち返れ真つ当な社会政策に 中江会長

戦後最大の岐路は決断力で 木村社長

ペンの力で世の中よくする 下村満子さん

総会は森事務局長の司会で開会、まず中江会長が「アベノチェイス」から脱却を「真つ当な社会政策に立ち返

れ」と題して会員仲間に呼びかけ、中江会長と旧知のエズラ・ヴォーゲルさんの「日中関係の現在と将来を憂え、

両国のリーダーたちに発した率直な忠告のいきさつ」「戦争を知らない世代のカー・チエリスならぬアベノ・チ

エリスの様相」「社友柳博雄さんの涙なしには読めない体験記」などを訴え共感を呼んだ。次いで森司会者が今年の新会賓を紹介し、名前を読みあげ、会場からの温かい拍手で祝福された。

来賓として出席の木村社長は「いま日本もわが社も戦後最大の岐路を迎えているいまこそジャーナリズムの使命を守る。消費税はさらなる岐路だが、決断力、行動力で舵を握り、乗り越えていく」と決意を語り拍手を浴びた。

新会賓を代表した下村満子さんは「年は取っても批判精神は忘れず、喜寿になるうが年など気にせず『年齢不詳』で責任を全うしてきた。喜寿の代表になったために正確な年齢がバレてしまった」と会場を沸かせた。そのあと「朝日新聞はすばらしいところ、そこで鍛えられたジャーナリズム精神を貫き、死ぬまでペンの力で定年のない人生を送り、世の中をよくしたい」と熱っぽく語った。

引き続き親睦会、タル酒が開かれ、ホール全体が語らいの熱気の渦となり、夜八時過ぎまで歓談が続いた。会員の皆さま、いつまでもお元気で、五月の総会でまたお会いしましょう。

「アベノチェイス」から脱却を 真つ当な社会政策に立ち返れ

ハーバード大学にある「日米関係プログラム」の名譽会長、エズラ・ヴォーゲルさんは三十五年前に日本で『ジャパン・アズ・ナンバワン』、三年前に中国で『鄧小平と中国の改革開放』というそれぞれベストセラーを出版していますが、新春には「ジャパン・タイムズ」のページ特集面で日中関係の現在と将来を憂える論文を出しました。

言うまでもなく、昨年十二月二十六日の安倍首相の靖国神社参拝が、尖閣諸島問題を中心に悪化していた日中関係を更に決定的なものにした事態を深く憂慮し、両国のリーダーたちに率直な忠告を發したものです。

ヴォーゲル教授の忠告

その中でヴォーゲルさんは、中国には領土問題で軍事的な圧力を行使しないように求めると共に、日本には次のように要請しています。

「日本は中国を刺激するような行動をとるべきではない。日本のトップ・リーダーたちは二度と靖国神社を参拝すべきではないし、かつての侵略による被害への謝罪をもう一度、確認しておくべきである」
そしてヴォーゲルさんは、中国が日本の軍国主義の復活を恐

れていること、中国の経済や軍事力が日本を凌駕し続けているのを日本が心配していることを踏まえて、両国が影響力のある少数の代表を出し合つて相互理解の話し合いを積み重ね、鄧小平・副主席がいた一九八〇年代のような文化・人的交流を深めるべきだ、と提言しました。

靖国参拝の直後に「日本の指導者が近隣諸国との緊張を悪化させるような行動を取ったことに失望している」との声明を出したアメリカ政府も、また「日本の危険なナショナリズム」と題した社説を掲載したニューヨーク・タイムズ紙も、「アベノミクスによる経済浮揚に軸足を置いて来た安倍首相が『右翼の大義』の実現に焦点を移しつつある」と批判した英ガーディアン紙も、同じ発想の上に立っていると思います。

戦争を知らない世代の行動

この安倍首相の靖国参拝に対する批判は、戦犯の合祀や政教分離への疑問に目をむつり戦後日本の一貫した平和・国際協調主義に反する行動を糾弾する形で、朝日新聞としても既に幅広く書き尽くしています。そんな中で喧嘩腰を続ける安倍さんの行動を、私なりに分析してみたい。

そこにはやはり、「戦争とその惨禍を知らない世代」の、ゲーム感覚的で無遠慮な行動パターンがある、と言わざるを得ません。更に、「戦後レジームの見直し」「強い日本を取り戻す」「積極的平和主義」「決められる政治」など、イメージ先行のポ



中江旧友会会長あいさつ

鳥ケ淵戦没者墓苑に参るべきだった」と焦点をぼかしながら十分な批判をしなかつた読売「国民との約束を果たした」とむしろ歓迎に回つた産経など、新聞・通信各社の対応ははつきり分かれました。

ピュリズムのなスローガンが追い駆けつこのように間断なく打ち出されて、「カー・チェイス」ならぬ「アベノチェイス」の様相にまでなっているのではないかと、と考えます。

新たな共生社会への追求を

論議を尽くさないまま数を持って強行裁決した昨年十二月六日の特定秘密保護法の成立にしても、これらを強く批判した朝日、毎日、日経、それに東京など主な地方紙、共同通信と、「千

な歩みを追求してゆかねばなりません。朝日新聞がその先頭に立たなければならぬことは、言うまでもありません。

最後に、大阪の旧友が私に贈つてくれた一冊の本を紹介したいと思います。大阪社会部、整理部、編集委員も務め、私が労働担当の時に朝日労組の本委員長だった柳博雄さんが著した「私もパーキンソン病患者です。高齢障害者医療や介護保健制度の行く末」という本です。深い感銘を受けながら一気に読ませてくださいました。

社友の「難病体験記」に感銘

柳さんがいま体験しつつある「薬がだんだん効かなくなり、寝たきりになる可能性が高く、回復の見込みは極めて薄い」この難病は、私の兄が三年前にこれで亡くなったので、ある程度は知っていました。しかし、帝塚山大学で「新聞学」二日間論の講師をしている時、ある日、突然動けなく、ベッドで茫然自失するばかりの瞬間から始まった柳さんの五年間の辛い、克明な闘病生活と、この「高齢重度障害」の患者がいかに問題の多い介護や、「一家心中の事態も予想できる」過酷な患者負担に苦しみながら生き延びているかなどの実態が、一日一〜二時間三百日間にわたつて文字通り骨身を削つて綴つた「体験記者」のルポの形で、涙なしには読めない貴重な記録になりました。柳さんはこの本の結びの中で、

こう訴えています。
「鳥の領有権問題や自衛力強化策などをめぐつて『国の誇り』論が盛り上がりつつある。一方、格差是正、弱者救済をめぐつての『国の責任』論は影をひそめた。これが、国民の生存権を保障する憲法二十五条を持つている国がやることか、と声をあげたくなる」

安倍政権が安全保障や「アベノミクス」にもまして取り組むべき喫緊の課題は、このような最低限の生存を保障する社会福祉政策の充実でなければなりません。つい一年前までの民主党政権がその未熟で稚拙な政治手法のため十分に果たせなかつた福祉政策を、自民党がかつての折角の長期政権で培つた「真」ではない「正」の政治手法を復活させながら、この「底辺の生存」「ミニマムの福祉」を保障してこそ、一年前の劇的な政権交代の意義が保障されることを、知るべきだと考えます。

そしてこのような真つ当な政治に立ち返り、民主主義の大義も守れるように方向づけをする責任が、いまこそ私たちメディアに、中でもリーダーング・ペーパーの朝日に課せられていることを、あらためて確認したいと思ひます。

私たち旧友会の一人ひとりが、日本の政治の新たな再生に取り組み現役たちの一層の奮闘に少しでも力を貸せるように、今年も頑張つてゆきましょう。

社長あいさつ



社業報告する木村社長

【決戦の年・岐路の年】

新年の仕事始めの日、今年も朝日新聞にとって「決戦の年」になる。戦いを勝ち抜かずして朝日新聞に未来はない。――そう訴えて、役員・社員の奮起と結束を呼びかけました。一八七九年、明治十二年に大阪で産声を上げた朝日新聞は、百三十五周年を迎えました。諸先輩、先人の営々たるご努力によって、朝日新聞はここに至るまで、この国に欠かせない、トップジャーナリズムとしての地位を不動のものにしました。私はいま朝日新聞が幾久しく人びとの信頼と時代の負託にこたえていくのかどうか、大きな岐路に立たされているの思いが募っています。昨年、安倍政権は特定秘密保護法を強行採決で成立させました。朝日新聞が紙面を通じて、国民の知る権利を顧みず、将来の情報公開の仕組みもあまいなこの治安立法の有り余る欠点を、強い危機感をもって指

摘し続けているのは当然であり、OBのみならずにもその報道姿勢に深く共感していただけたことと思います。安倍首相は、強行姿勢に社会からの批判が強まったにもかかわらず、昨年末には、靖国神社に参拝しました。「一強多弱」と評される政治状況のもとで、政権は視界の先に憲法改正を見ています。もちろん、憲法は不磨の大典ではありませんが、あの無謀な自爆戦争によって他国を軍靴で踏みじり、自国を焼け野原と化し、幾多の貴い命を奪ったことへの痛恨の思いと、不戦への誓いとともに、戦後日本が手にしたのが今の憲法ではないか。現政権が、数々の力を頼みに、憲法の理念の柱である立憲主義を顧みず、国家が説く道徳に服することを国民

に求め、古色蒼然たる国家主義を前面に押し出した憲法改正をめぐすのなら、それは、私たちが培ってきたジャーナリズムに対する挑戦ともなるでしょう。戦後日本は重大な岐路を迎えています。朝日新聞は志の高い、ジャーナリズムの企業であり、かつして権力には屈しません。圧力に負け、ペンを曲げるくらいなら、ペンを折る。社員全員が、強い使命感と覚悟をもって臨まなければいけない一年になると、私は思っています。おかげさまで紙面はたいへん元気です。最近では、猪瀬東京都

志を高く、権力に届せず 元氣な紙面を 経営基盤強化に聖域なき構造改革

編集委員を福島に常駐させるなど発信力をさらに強化し、「風化」にあらがい、この問題を粘り強く、どこまでも問いつける朝日新聞の姿勢を鮮明にしていまいます。

【岐路・消費増税と構造改革】もうひとつの岐路は、四月の消費増税です。消費増税は値上げではありませんから、本体価格に三%の増税分をそのまま転嫁して、読者のみなさんにご理解をお願いするのが筋だと思っています。ただ、若者の新聞離れやネットの普及による紙離れで部数が減っていく傾向が続いて

知事を辞職に追い込んだ徳洲会からの五千万円供与や、日展をめぐる不正など、他の追従を許さない見事なスクープが続きました。昨年度の「プロメテウスの罠」に続き、今年度も、東京電力福島第一原発事故をめぐる一連の「新抜き除染」の報道で二年連続の新聞協会賞を受けました。原発事故の報道につきま

いる中で、消費増税をきっかけに新聞をやめる人たちがさらに増えるのではないかと、新聞業界は戦々恐々としています。残念ながら、他を圧倒する内容の記事や論評が連日の紙面を飾ったとしても、それで朝日新聞の勝ち残り保証されるわけではありません。ここで対応を誤れば、伝統的なジャーナリズムの活動そのものが難しくなってしまうかねません。ここは歯を食いしばって部数減を食い止め、部数増につなげていかなければならないと、販売面では、考える限りの対策をすでに実行に

移しています。また、ASAの経営改善を促し、「次世代型の販売」に転換するための構造改革を増税対策と一体で進めます。今年は「構造改革元年」と銘打ち、販売に限らず、各部門で様々な構造改革を進めてまいります。そのために昨年十一月、社内に構造改革推進本部を発足させました。朝日新聞がこれからも末永く存在し続けるには、成功体験を捨て、急激な環境変化にも対応できる、しなやかにチャレンジングな組織に変え、経営基盤を格段に強化していく必要があります。創業から百三十五年を迎えた朝日新聞の、いわば「棚卸し」です。

【安定した年金制度のために】安定した年金制度を維持するため、昨年、本社は五・五%の給付利率で年金を受給している約二千三百人のOBのみならず、段階的な給付利率の引き下げをお願いいたしました。おかげさまで、約七五%のOBの方から引き下げに同意をいただくことができ、この月から利率が引き下げられました。二年ごと〇・五ポイントずつ、四回に分けて給付利率を下げ、六年後の二〇二〇年二月には他のOB・現役と同様、三五%の利率で統一されることとなります。経営を預かるものとして、改めてOBのみならずのご理解とご協力に心から感謝を申し上げます。岐路に立つこの決戦の一年、私は何事からも決して逃げず、勇氣を持って難關に挑んでいくことを、お約束します。「やっぱり朝日新聞は日本の民主主義に欠かせないものだ」と実感していただけるよう、先頭に立って言論・報道機関の朝日新聞を守り抜く決意です。

き方と意識を、根底から変えて

喜寿記念講演

人類史上例のない福島原発大惨事 秘密保護法案・靖国等政府対応に怒り

新会賓代表 下村 満子さん

私の土台・未来先取りの朝日新聞



語りかける下村満子さん

本日「喜寿」のお祝いということ、このように高いところに立たせていただき、大変恐縮しております。同期を代表し、心から感謝しあげます。と言いながら、実は内心、「本当におめでたいのかな」と、思っている自分がいます。それがジャーナリストの悪い癖で、米寿になろうと、白寿になろうと、この「根性」は変わらないだろうと、時々いやになります。

若い男性に衝撃?

懐疑の第一は、「喜寿」のお祝い、です。私は、自分の年齢を日頃全く忘れており、いま、わが人生で最も忙しい毎日を過

ごしています。気がつく、一緒に仕事や活動をしている相手が相対的にどんどん若返っていく(相手は現役なので)、何だか自分もその世代の一員のような気分になってきます。従って私は、年齢を聞かれると、「年齢不詳」「トシなんて関係ないでしょ。何で聞くの?」などと言ってきました。それが今回、正確な年齢がバレってしまったのです。これ以上の不幸は、あるでしょうか私の周りには、「若い男性たち」に衝撃と失望を与えることになるのですから。別に隠すつもりはないのですが、日本人って、人に年齢のレッテ

ルを貼り、区分けて、その箱に収まらない人を、「いいトシをして」などと批判します。これって年齢差別だと思うのです。だから、私は以前から、必要な場合は別にして、やたらに年齢を聞くべきではない、という運動をしています。聞かなくても、だいたいの世代はわかるもので、平素はそれで十分だと思います。だから、新聞が何にでも年齢を書くことにも反対です。ま、でも、それは、あくまでも個人的な事です。

第二は、「新しい年が、本当におめでとうと言える年になるのか」という大疑念です。政権

交代で「何かが大きく変わる」と興奮したのはつかの間。東日本大震災、ことに地震・津波という自然災害に加え、原発被災という人類の三重苦に同時に襲われるという人類史上例のない福島の大惨事に対する政府の対応、秘密保護法、沖縄、靖国、日中・日韓関係、憲法等々、何もかもが、毎朝新聞を開くと、怒り心頭が発する事ばかりで、精神衛生上、誠に良くない日々です。朝日新聞はこんな厳しい状況の中で、重要なスタンプをもものにしていて頼もしい限りで

はありますが、それでも心配なことばかりです。こんな時代に「新年おめでとう」などと、ノ1天気なことを言っているの、だろうか、という疑念です。**ぶれず、揺るがず、毅然と正論を朝日を卒業してしまつた今となつては、外野でやきもきするしかないのですが、今こそ朝日新聞社が、ぶれず、揺るがず、勇気を持ち、毅然として正論を発信し続けていただきたいと、強く願っております。正論ということは、「人間として正しいことは、何か」を判断基準にするということ、です。**

私は、朝日新聞ではエリート員、朝日新聞編集委員、ハーバード大学ニーマン特別研究員、「朝日ジャーナル」編集長といった道をたどり、誠にお恥ずかしいのですが、定年まで全くもせず、父が死去したため、両親の経営していた医療財団の経営を引き継ぐため、泣く泣く朝日新聞社を途中退社いたしました。アルバイトから嘱託を経て正社員になるまでに十年近くかかりました。ですから、昨年、今年の新年総会で、喜寿の挨拶をするようにと言われた時には、朝日人の代表には最もふさわしくない人間ですと、固辞致しました。が、中江利忠旧友会会

年齢関係なし、わが人生で最も忙しい「年齢不詳」で活躍

とは対極の存在でした。言ってみれば、「落ちこぼれ」「おみそ」でした。何しろ、アメリカ留学から帰国した直後、東京オリビック取材のための朝日新聞社・通訳センターで、英語の通訳のアルバイトをしたのが朝日のご縁の始まりで、その後、やはりアルバイトで、当時朝日が出していた「This Is Japan」という英文の雑誌の編集部に入りました。つまり「アルバイトの女の子」でスタートしたのですから。その後「週刊朝日」記者、朝日新聞ニューヨーク特派

長も、なかなか頑固な方で、「まあ、やれ」の一点張り、このように恥をさらす結果となつてしまいました。

でも、振り返ってみますと、私が朝日新聞社で過ごしたアルバイト時代も含めた三十五年は、私の人生の中でも、実に楽しく充実した、多くを学び、多くの素晴らしい方々との出会いをいただいた、幸せな期間でした。当然、辛かったこと、泣いた事、辞めようかと思つた時もありました。一番辛かったのは、やはり「朝日ジャーナル」編集長に

なり、編集部員と共にジャーナル変革に熱く燃えて取り組み、ようやく再生の芽が見え始めた一年後、つまり編集長になってわずか一年で廃刊が決まった時でした。三十年間赤字を垂れ流していた「朝日ジャーナル」を、たった一年で赤字にしろというのは過酷すぎる。私は魔法使いではない。裏切られたような気持ちになり、血気はやる編集部員を引き連れ、というより彼等に追い立てられるように、社長室に押しかけ、当時社長だった中江現旧友会会長に撤回を迫り、さもなければ「刺し違える」などと物騒なことを涙ながらに訴えました。中江社長は私たちの話をちゃんと聞き、かなりの理解を示して下さいました。が、諸般の事情で結局は廃刊になりました。今となつて、そうしたすべてのことが懐かしく、私の成長の糧になった大切な経験だつたと思つています。ただ、「もし、ジャーナルがあつた時廃刊にならなかつたら、日本の言論界、メディア界は、今とどう違つていただろう」と、フツと考えることはあります。

人生かえた混血王女のスタンプ

もう一つ、私の人生を変えた一番大きな思い出ですが、「週刊朝日」の駆け出しの時、まだ知られざる秘境だった中東のオマーン国の王様と日本人女性との混血の王女の独占インタビューというスタンプをとつたこと

です。ほとんど命がけの取材でしたが、その時の興奮は、今でも昨日の事のように思い出されます。何か運命的なものを感じました。女性初の海外駐在特派員として、ニューヨークに駐在し、後に続く女性の為にも失敗は許されないと、かなり肩に力を入れて必死で取材に駆け回ったことも、懐かしい思い出です。今や、女性の海外特派員は当たり前となっており、感無量の気持ちになります。

アルバイトからスタートした女性記者を、まだ女性差別が露骨だったあの時代に、海外取材に出し、初の駐在特派員にし、編集委員や「朝日ジャーナル」編集長という辞令を出したというのは、今思うと大変な英断であり、朝日新聞社というものは、未来を先取りしていた新聞社だったのだなあと、しみじみ有り難く思っています。また、当時の朝日新聞の論調は、極めて質が高く(今、質が低いという意味ではありませんが)、「ならぬものは、ならぬ!」と、批判を恐れずはつきりと、ブレずに、明確な主張を発信していました。そういう環境の中で、ジャーナリズム精神を叩き込まれたことが、今でも、私の土台石になっています。

実は、私、自分の本質は、未だに一貫してジャーナリストだと思っております。ジャーナリストというのは、作家や画家や

詩人などと同じように、死ぬまでジャーナリストだ。ジャーナリストに定年はない、と思っております。朝、新聞を開き、今の日本の現状に怒りを抑えられなくなるのは、新聞社でのサラリーマン記者をやめても、ジャーナリスト魂というか根性は、消えることはない、ということだと思えます。私は親の事業を引き継いで経営者をやっていた時も、一貫して「私はフリーのジャーナリストです。私の経営のスタイルは、ジャーナリストティック経営です」と言い続けていました。実際、医療の経営をしながら、いつも考えていることは「あるべき医療の姿」でした。そして、いまでもフリーでジャーナリスト活動を続けています。

そんな中、四年ほど前、ふと気がつく、国際社会における日本の地位は地に落ち、経済は停滞し、子供や学生の学力は低下し、いじめはますます陰湿になり、自殺数は世界一になり、若者たちは全く元気がなく、日本人全体が思考停止し、内向きになり、保守的になり、革新的エネルギーやダイナミズムを失い、鬱状態になっていることに愕然としました。自分の権利ばかりを声高に主張し、社会に対する責任は果たさない利己的な人たちが増え、一億総評論家になり、人の批判ばかりして、自分は何もしない。正直、メディアの質の低下もひどいと思うよ

うになりました。本当のジャーナリズム、権力に切り込む報道が少なくなり、ただの情報の垂れ流し、情報産業になってしまっている。本質論に踏み込むのを怖がって、自主規制しているように思えることが度々です。少しでも世の中を良くしたいという、今思えば青臭い、でも純粹な思いで入ったジャーナリズムの世界でしたが、いったい私の四十年間は何だったのだろうか、思い詰めてしまいました。

「下村満子の生き方塾」なぜ日本がこのような国にな

のためです。政治家自身の「心のレベル」が低いからです。日本の再生は「日本人の心の再生」から始めなければならない、と思いました。

で、私が思い立ったのが、「命とは何か、生きるとは何か、人は何のために生きるのか」という根本問題と向き合う「下村満子の生き方塾」でした。両親の故郷が福島県で、先祖の家を引き継いでいるので、そこで寺子屋でもやろう、と思い立ちました。まさに、ドンキホーテであり、ごまめの歯ぎしりであるこ

いしばって、今日まで続けています。入塾条件は「人間であること」だけで、塾生は十五歳から八十三歳までの多様な職業やバックグラウンドを持った方々、且つ東京や遠く関西など他県からも通ってくる人たちもかなりいます。毎年3・11の大震災いと原発被災を忘れないために、原発被災に苦しむいわき市の新舞子浜に、日の出の時間に手をつないで並び、鎮魂の祈り、生きていくことへの感謝、そして「この地を必ず復興させます」と誓い、「ふるさと」を合唱す

3・11の三重苦忘れぬため 鎮魂の祈りと生への感謝、復興の誓い

つてしまったのだろうと色々考えました。突き詰めると、私の結論は、戦後六十数年の間に、日本は経済的な豊かさは手にしたけれど、それと反比例して、日本人の心が劣化し、「心貧しき国民」になってしまった、というのでした。だから、政治改革、教育改革、公務員改革といった、ググソープブルの1コマを取り上げて改革しても、もはやだめだ、ということでした。事実「改革、改革」といくら騒ぎ、法律を作っても、一向に良くなっていません。政権交代をしてもダメだったのも、そ

とは承知の上です。福島各地で辻説法のような説明会をやっているうちに、二十人ぐらいの予定が二百人も集まり、開塾を二〇一一年四月十七日と決め、準備を進めたら、開塾一カ月前に、あの大震災と原発事故でした。開塾は無理だとあきらめたところ、福島の人たちから、「こそ」命とは、「生きていく」と向き合わなければ、生きていけません」と言われ、予定通り大震災のわずか一カ月後に開塾しました。新幹線が福島までつな

ながった二日後でした。あれから三年、何とか歯を食

る「福島を忘れない! 祈りの集い」も、続けています。原発事故で故郷を失った福島市の町村を中心に、十三市町村が後援してくれています。

もう一つのごまめの歯ぎしりは、昨年の春、インターネット・テレビの会社、デモクラTVを立ち上げました。これも、だんだん大政翼賛会的になり、権力に対するチェックパワーを失い、権力からの圧力を恐れ自主規制する今のメディアに危機感を抱き、志を同じくするジャーナリスト有志十数人と始めました。毎週の政治、経済、外交他、重

要な問題を取り上げ論争するトーク番組だけでなく、昨秋から「下村満子のテレビ生き方塾、文句あつか!」という一時間番組を持って、発信しています。

未来は感謝のお返し人生で

人生最後のコーナーに差し掛かった今、これまで沢山の方に助けていただいたことへの感謝を、これからは「天」にお返しをする人生を生きたいと思っています。私にとって、「生き方塾」からの発信も、「デモクラTV」も、「祈りの集い」もすべて、私のジャーナリスト活動の一部だと思っています。そして、いま私がこうした活動ができるのも、朝日新聞社で叩き込まれた基本とジャーナリスト魂が、私の根底に流れ続けているからであって、むしろ朝日新聞社という組織の外にいないから、かえって自由に活動できるところもあります。

私は、朝日新聞の優秀で純粋な魂を持つ多くのOBの方々が、今こそ組織に縛られない自由な立場で、日本の再生、世直しにご活躍頂く時ではないかと、強く思っています。それが朝日新聞への恩返しであり、応援にもなると思っています。だから、喜寿だからといって、ご隠居さんにならず、死ぬまでジャーナリストとしての鋭い批判精神と感性を持ち続けたいものだと思います。

平成26年 新年総会出席者

喜寿出席者

- (い) 石岡統明 石関柗美
石見谷元 猪狩 章
岩井 章
- (く) 窪田康孝
小勝竹雄 近藤源司
- (さ) 坂巻 武
- (し) 島田尚男 下村満子
- (た) 高木 淳
- (と) 戸田 佐
- (な) 永山義高
- (に) 蛭川真夫
- (は) 羽原清雅
- (む) 村越六蔵

会員出席者

- (あ) 荒木忠直 青山 勇
赤堀昭雄 秋庭武美
秋山康男 浅井泰範
阿部知子 安部光俊
阿部征夫 荒井利尚
荒木信義 荒田茂夫

- (い) 粟田房穂 安藤保雄
飯田秀雄 飯田正美
飯野幹雄 池嶋 功
池田正勝 石井忠之
石川喜代司 板垣 誠
- (く) 市川 健 伊藤 壯
稲水金仁 乾 雄成
岩井弘安 岩松幸正
壹岐健志 石井哲次郎
池田 守
- (こ) 上田久行 内山 眞
宇野勝己
- (お) 大野功雄 大坪正徳
奥川恭子 大倉文雄
大重二夫 大塚 一郎
岡田和巳 岡部匡克
岡部康世 岡村 徹
小栗昌宏 小田繁美
小田川興 奥田信久
- (か) 春日廣之助 粕谷日出夫
片岡久明 片山朝雄
香月浩之 加藤章吏
加藤嘉照 加藤次一
加藤光雄 金井 進
鐘ヶ江健児 金子良三
加納安實 叶内 均
蒲田浩二郎 亀本泰夫

- (き) 川瀬智長 川戸弘次
川原基尚 川辺久信
菊池 武 岸田隆秀
君和田正夫 清時竹彦
喜久村繁
- (こ) 草鹿 恵 工藤叶二
工藤健一 久保田 泉
黒河 晃 黒川ハジメ
高口信行 桑折勇一
児島眞雄 後藤清光
後藤 襄 小西初彦
小林 功 小林清吉
小林淑郎 小林三千夫
小松 直 五味秀雄
込山光雄 小山 敬
小山千宏 紺谷安弘
近藤源司 近藤龍夫
近藤行雄 近野 巖
坂井清保 斎藤善男
斎藤幹雄 笹井輝雄
佐々木博志 佐藤清治
猿見田肇雄 沢野正明
澤村綺一郎 左近允輝一
志賀 浩 柴 昭二
芝 實 柴田瑠一
柴田眞樹 柴田鉄治
島田貴明 島戸一臣
- (け) 喜久村繁
- (こ) 草鹿 恵 工藤叶二
工藤健一 久保田 泉
黒河 晃 黒川ハジメ
高口信行 桑折勇一
児島眞雄 後藤清光
後藤 襄 小西初彦
小林 功 小林清吉
小林淑郎 小林三千夫
小松 直 五味秀雄
込山光雄 小山 敬
小山千宏 紺谷安弘
近藤源司 近藤龍夫
近藤行雄 近野 巖
坂井清保 斎藤善男
斎藤幹雄 笹井輝雄
佐々木博志 佐藤清治
猿見田肇雄 沢野正明
澤村綺一郎 左近允輝一
志賀 浩 柴 昭二
芝 實 柴田瑠一
柴田眞樹 柴田鉄治
島田貴明 島戸一臣

- (き) 清水 勝 志村 勇
志村嘉一郎
菅野清志 菅原義一
杉谷隆司 鈴木聞二
鈴木益民 須田 徹
砂山 清
仙名 紀 善當治昌
相馬晃一
竹内實昭 田中右太生
高垣徹蔵 高見弘保
高山 智 高山修一
滝下 修 詫摩俊一
竹市義弘 竹内 晟
竹田 純 武田 透
竹村文雄 龍神一郎
田辺 功 谷 久光
谷口富喜男 田谷宣夫
千綿雅夫
鶴谷守男
寺田達雄 照山恵美子
徳江景英 都丸 司
富田順也
中江利忠 名倉正昌
中島 泰 中島富治
内藤頼誼 中北宏八
中澤信男 中島清成
中島善範 永田芳男
中野 劼 中野義次正
中村糾造
西井哲郎 錦織正文

- (け) 二本柳典彦
沼上 勇
根津静男
野本 登
島山弘道 羽鳥健一郎
花井 尊 林 莊祐
林 常蔵 原 孝治
原田利次
久富道生 菱沼幸次
菱沼保幸 檜山 隆
平賀義男 開内恭寛
平野新介 比留間悦雄
広瀬道貞
藤巻 隆 深草眞一
福井正行 福岡照夫
藤島啓之介 藤田修三
藤巻 稔 福田喜大
別府次郎 別府伸治
宝明美男 星野富榮
細川淳一 洞口和夫
堀 鐵藏 堀井淳夫
堀越作治
牧野詔正 前原寛成
牧野信彦 増田 稔
松 功 松井 茂
松永健夫 松本精次
松本秀男 松本寛義
水木初彦 見市 元
三浦義晴 三石 昭
峯岸久雄 三野孝文

- (け) 宮内 繁 三宅勝喜
宮坂秀一 宮崎仁一
宮崎千勝
村野 坦 宗田文隆
村上吉男 村田歆吾
村田順一 村山朝夫
森 精一郎 森下 昇
諸 寿子 茂眞正記
森 修二 森 治郎
森田恭生
山越英一 山村行志
安中宏明 柳瀬幸洋
山川三千雄 山崎英明
山崎悦孝 山下靖典
山本 武 山本久二男
山本祥之
雪江武雄
横田稲光 吉川 宏
吉澤忠一 吉田尚彦
吉田良吉
若目田倫子 和井田祐三
渡部二六 渡辺興博
渡辺 晋 渡辺 登
渡邊 宏 渡辺元通
(出席者二百八十五名)
- (こ) 寄付
▽ありがとうございます。
中江利忠様 五千元



木村伊量社長、田辺功さん



(左)牧野信彦さん、中江会長、大野功雄副会長、窪田康孝さん



(左)広瀬道貞さん、藤島啓之介さん、石井哲次郎さん



(左)浅井泰範さん、内藤頼誼さん、寺田達雄さん



増田稔さん、都丸司さん (左)池内文雄さん、村野坦さん、羽原清雅さん、香月浩之さん 君和田正夫さん、森治郎さん



小畑和敏監査役、洞口和夫さん

阿部知子さん、下村満子さん

元運輸部の人たち



(左) 森田恭生さん、山本久二男さん、木村社長、三宅勝喜さん、近藤行雄さん (左) 山下靖典さん、中江会長、高木淳さん



(左) 高口信行さん、滝下修さん、片山朝雄さん (左) 岡田和巳さん、秋山耿太郎さん、龍神一郎さん、後藤尚雄監査役、村田順一さん、志賀浩さん



小松直さん、喜久村繁さん 島田尚男さん、滝下修さん、堀鉄蔵さん 宮田謙一企画事業本部長、鐘ヶ江健児さん



(左) 佐々木博志さん、川瀬智長さん、原田利次さん、坂井清保さん、石井忠之さん、加藤嘉照さん (左) 猿見田肇雄さん、沢村綺一郎さん、三宅勝喜さん、林常蔵さん



(左)安藤保雄さん、藤巻隆さん、松永健夫さん 近藤龍夫さん、菅野清志さん (左)見市元さん、中江会長、森治郎さん



鈴木聞二さん、富田順也さん (左)鈴木益民さん、柴田眞樹さん、相馬晃一さん (左)大塚一郎さん、沼上勇さん、叶内均さん、松功さん



砂山清さん、小田川興さん、 岡村徹さん、中北宏八さん 草鹿恵さん、高山智さん 峯岸久雄さん、池田正勝さん



(左)前原寛成さん、奥田信久さん、笹井輝雄さん、柴田琇一さん、石岡統明さん (左)竹田純さん、秋山康男さん、大倉文雄さん



(左) 荒田茂夫さん、村田歎吾さん、錦織正文さん

(左) 茂貫正記さん、石見谷元さん、内山真さん

谷久光さん、荒井利尚さん



(左) 菅原義一さん、松本精次さん、山崎英明さん

(左) 平野新介さん、谷久光さん、堀井淳夫さん

(左) 宗田文隆さん、中江会長、壱岐健志さん



(左) 水木初彦さん、秋庭武美さん、稲永金仁さん、中島清成さん

(左) 三野孝文さん、川辺久信さん、松井茂さん、千綿雅夫さん、雪江武雄さん

(左) 田畑良治財務本部長、鐘ヶ江健児さん、二本柳典彦さん



(左) 伊藤荘さん、竹内實昭さん、横田稲光さん、都丸司さん、笹井輝雄さん

(左) 山崎悦孝さん、島田貴明さん、荒木信義さん、沢野正明さん